

第1回 人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会	参考 資料1
平成29年8月3日	

平成24年度人生の最終段階における医療に関する意識調査結果

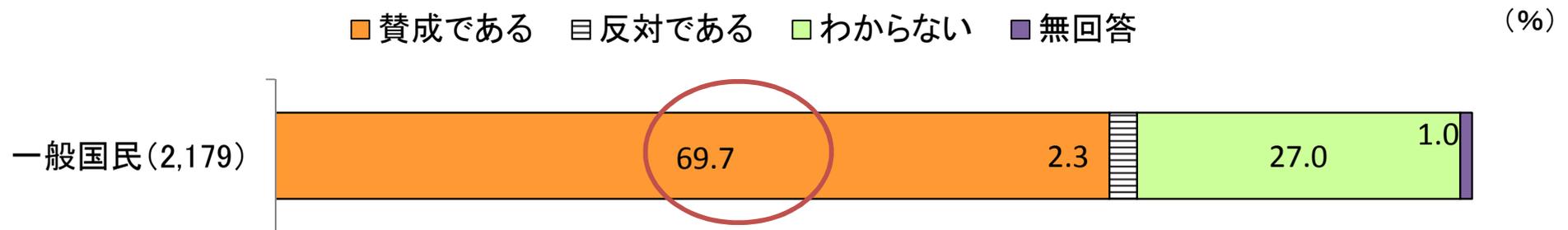
治療方針の決定方法①

- 人生の最終段階における医療について家族と話し合ったことがある方は約4割、自分で判断できなくなった場合に備えて、どのような治療を受けたいか、あるいは受けたくないかなどを記載した書面をあらかじめ作成しておくことに7割が賛成している一方で、実際に作成しているのは3%であった。

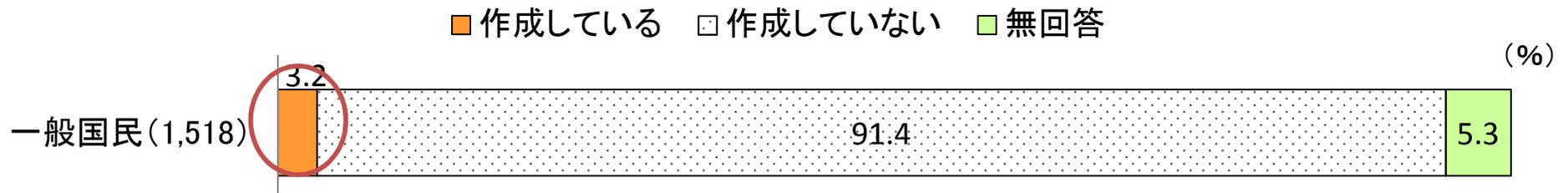
■ 人生の最終段階における医療について家族と話し合ったことがある者の割合



■ 意思表示の書面をあらかじめ作成しておくことへの賛否



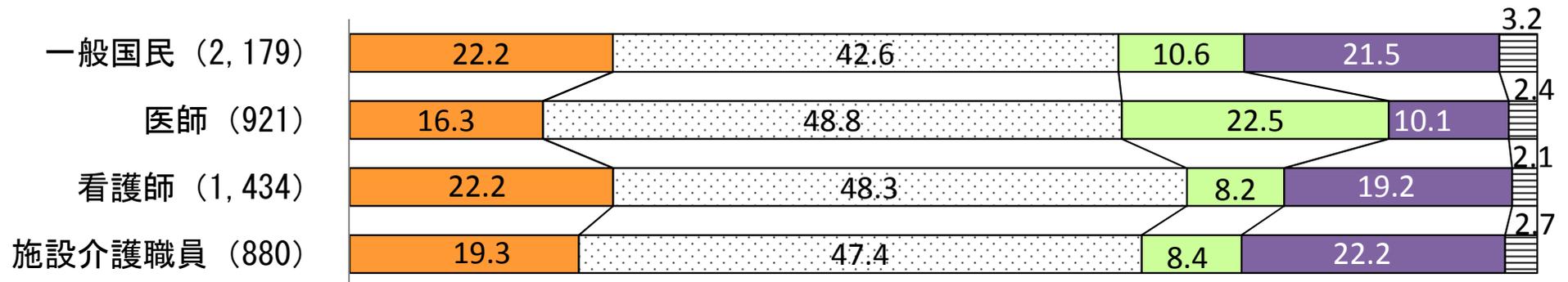
■ 意思表示の書面の作成状況 (意思表示の書面の作成に「賛成」と回答した者)



治療方針の決定方法②

■ 事前指示書に従った治療を行うことを法律で定めることの賛否

■ 定めてほしい □ 定めなくてもよい ■ 定めるべきでない ■ わからない ■ 無回答



さまざまな状況において過ごしたい場所

- ケース1の場合は7割が居宅を希望しているが、それ以外の場合は医療機関もしくは施設での療養を希望している。

ケース1

末期がんであるが、食事はよくとれ、痛みもなく、意識や判断力は健康なときと同様に保たれている場合

ケース2

末期がんで、食事や呼吸が不自由であるが、痛みはなく、意識や判断力は健康なときと同様に保たれている場合

ケース3

重度の心臓病で、身の回りの手助けが必要であるが、意識や判断力は健康なときと同様に保たれている場合

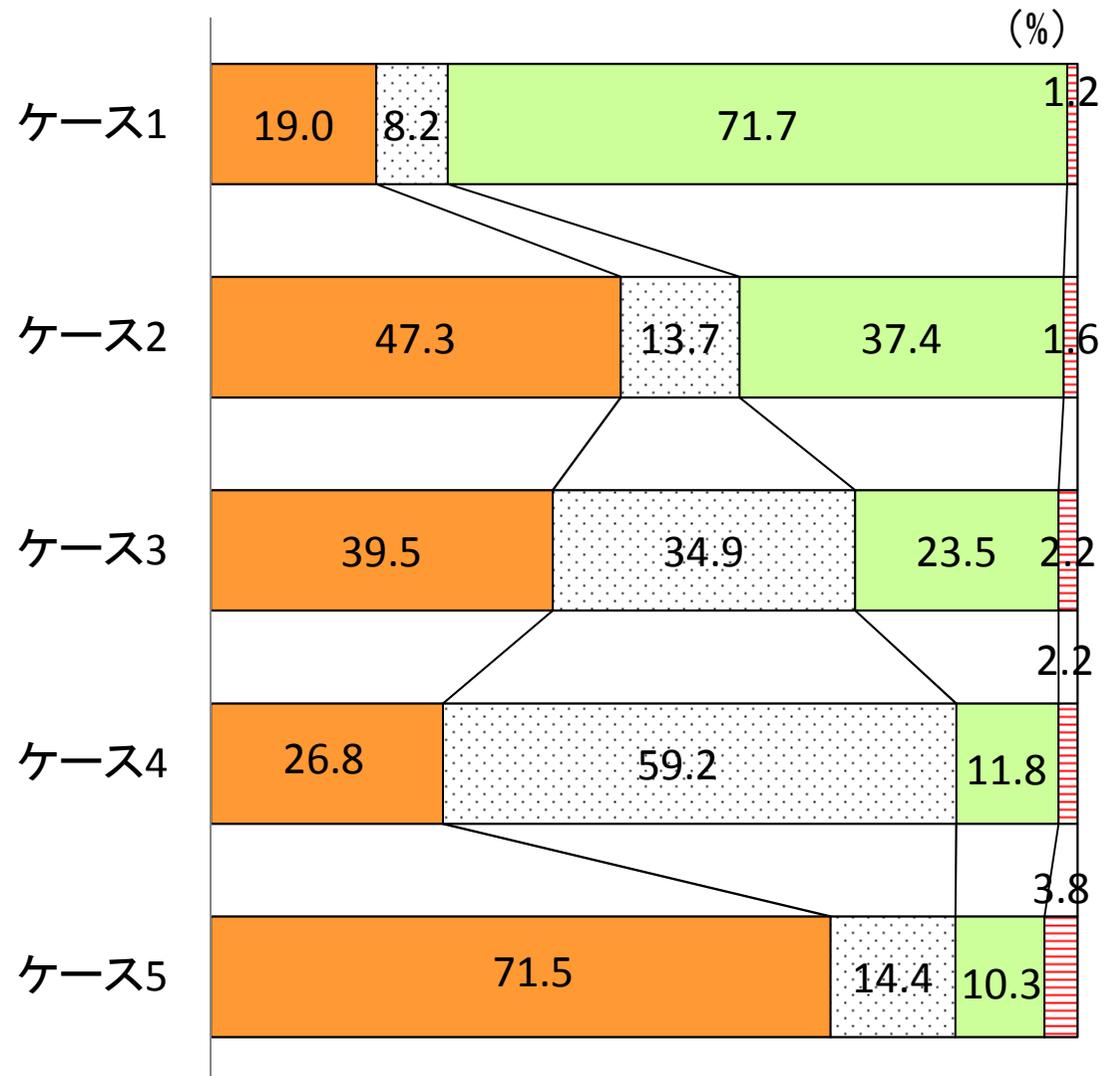
ケース4

認知症が進行し、身の回りの手助けが必要で、かなり衰弱が進んできた場合

ケース5

交通事故により半年以上意識がなく管から栄養を取っている状態で、衰弱が進んでいる場合

■ 医療機関 ■ 施設 ■ 居宅 ■ 無回答



さまざまな状況において希望する医療

- さまざまな人生の最終段階の状況において希望する治療方針を詳細に尋ねたところ、どのような状況でも侵襲性が高い等の一定以上の治療は望まない傾向であった

■ さまざまな人生の最終段階の状況において希望する治療方針

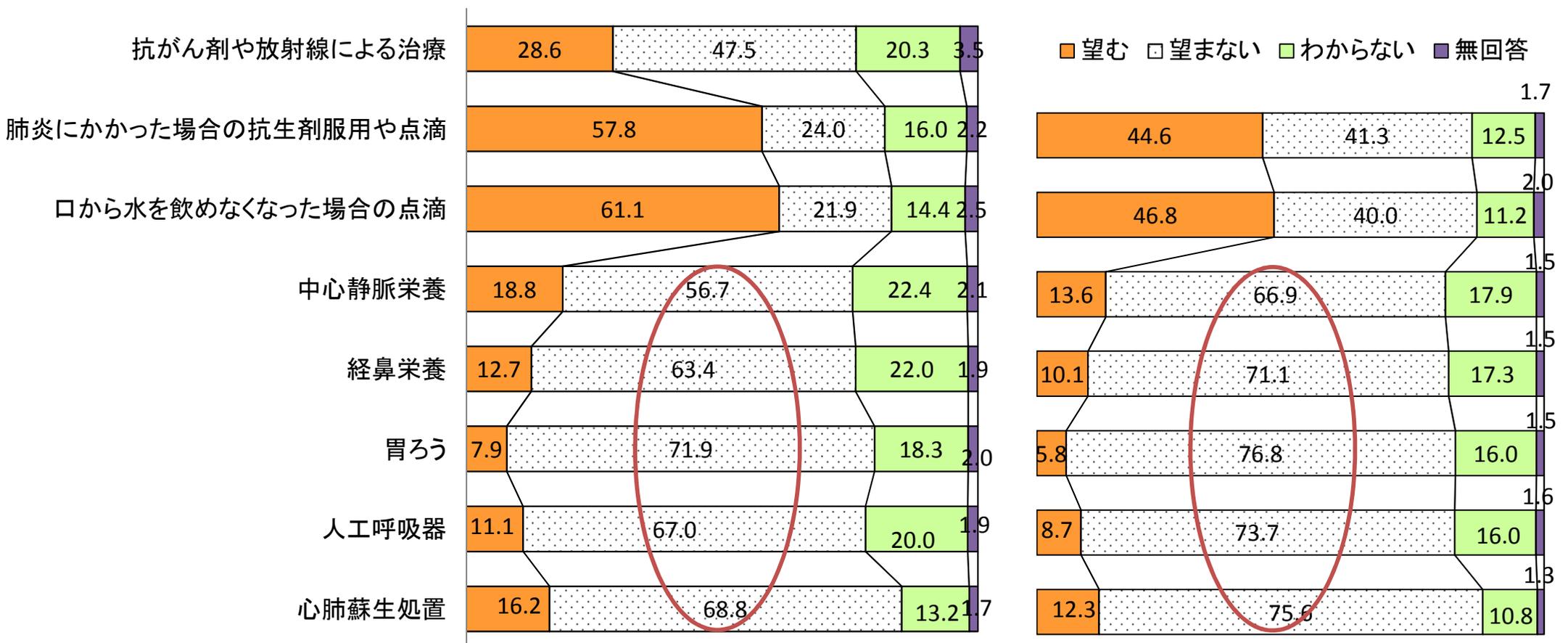
□ 末期がん

□ 認知症

(%)

■ 望む □ 望まない □ わからない ■ 無回答

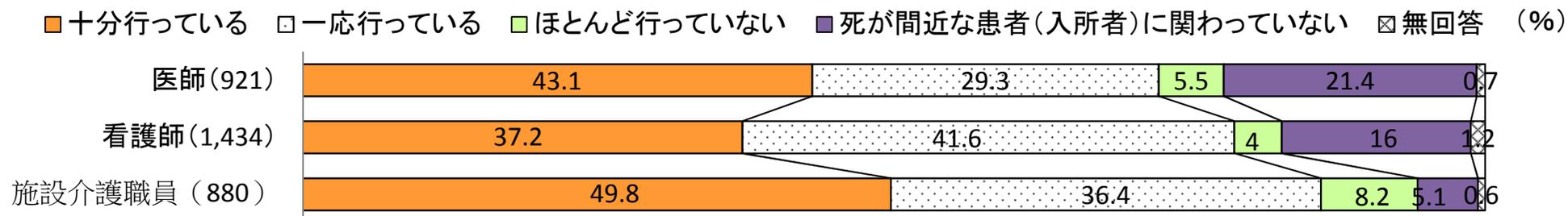
■ 望む □ 望まない □ わからない ■ 無回答



人生の最終段階における医療に関する意識調査結果（平成25年3月）

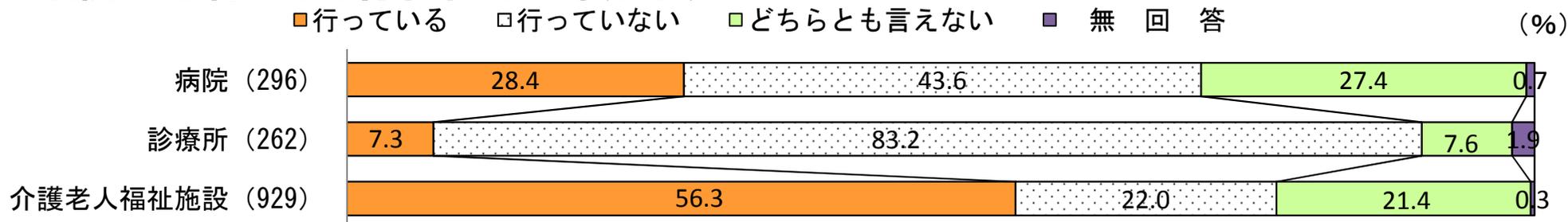
■ 患者（入所者）との話し合いの実態

□ 患者（入所者）やその家族に対する治療方針の話し合いは約4割で行われていた。



■ 職員に対する終末期医療に関する教育・研修の実施状況

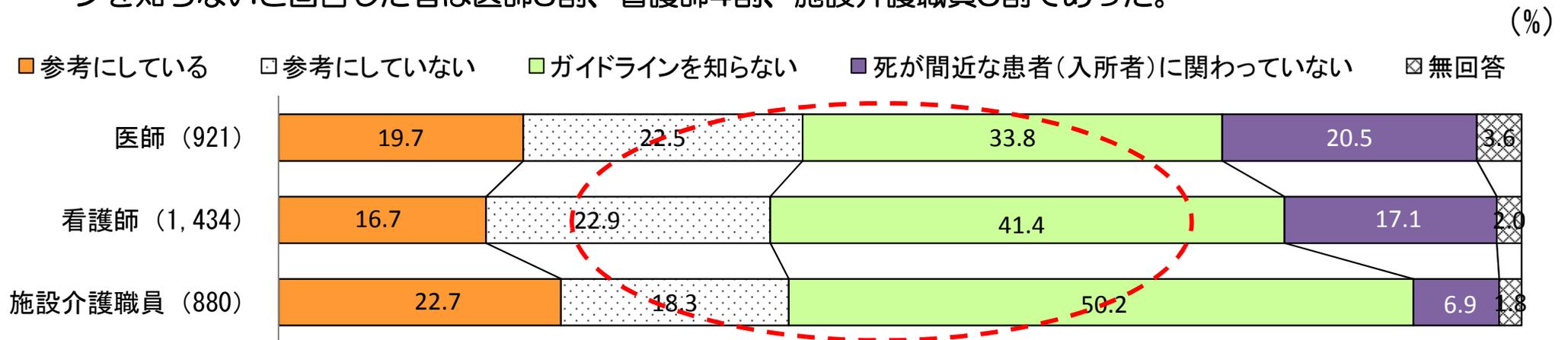
□ 医療福祉従事者に対する人生の最終段階における医療に関する研修について、病院では約4割で行われていなかった



国及び学会等のガイドラインの利用状況

■ 「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」の利用状況

- ガイドラインを参考にしている割合は約2割で、施設介護職員がもっとも高かった。一方、ガイドラインを知らないと回答した者は医師3割、看護師4割、施設介護職員5割であった。



■ 学会等のガイドラインの利用状況

- 学会等のガイドラインを参考にしている割合は約2割で、医師がもっとも高かった。一方、ガイドラインを知らないと回答した者は医師3割、看護師4割、施設介護職員5割であった。

